

# 看護学生の対話能力育成に プレイバックシアターを活用する

横山彰三(宮崎大学医学部)

## 【目的】

近年、看護基礎教育の内容の見直しにともない「コミュニケーション能力の強化に関する内容を充実」(厚労省看護基礎教育検討会報告書,2019)することが示された。療養の場の多様化に対応できる看護人材の育成も急務となり、患者のナラティブが重要な教育項目となっている。それに応じる形で、宮崎大学医学部看護学科1年生向けに必修科目「NVCで育む対話能力」が令和5年度に新規開講した。そのうち2コマ(90分×2)をあてて行われた、演劇的手法によるコミュニケーション能力養成の試みを評価した。

## 【方法】

授業(90分×2コマ)を使い、大分県で活動しているプレイバックシアター(PBT)劇団 ONCE(ワンス)のメンバー4名に来学していただき、ワークショップ形式で学生58名(欠席2)に PBT を体験してもらった。PBT は、会場にいる聴衆の中から一人の話手が自分のストーリーを語り、それを前方のアクター3名が演じるという即興再現劇である。1コマ目はアイスブレイク、ウォームアップとして参加者全員が身体を動かし、休憩20分を挟んで、続く2コマ目にONCEの公演を観劇した。その後簡単なアンケートを実施した(n=58)。なお、アンケートは匿名化を施した。「1、他者への理解が深まりましたか?」「2、様々な価値観を受け入れる機会になりましたか?」「3、あなた自身の他者とのかかわりを見直す機会になりましたか?」「4、参加した前と後で気持ちや考えに変化がありましたか?」「5今後機会があればあなたの体験したことを劇で見てみたいと思いますか?」の項目について終了後アンケート用紙により質問した。



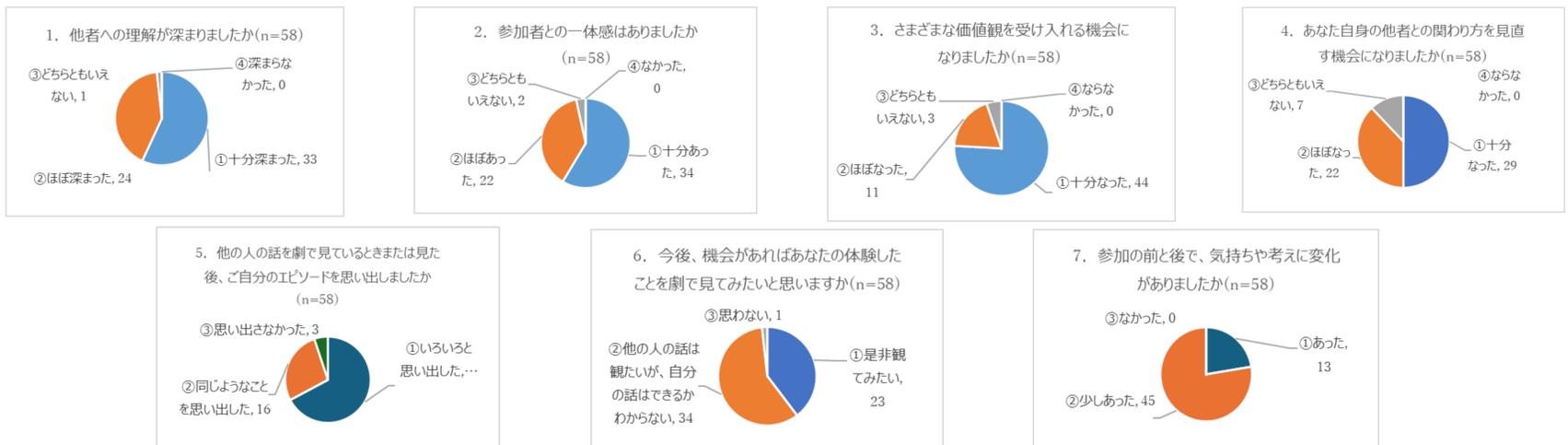
前半: アイスブレイク  
ソシオメトリ風景

後半: ONCE公演風景

後半: 学生にもむちゃぶり参加してもらいました

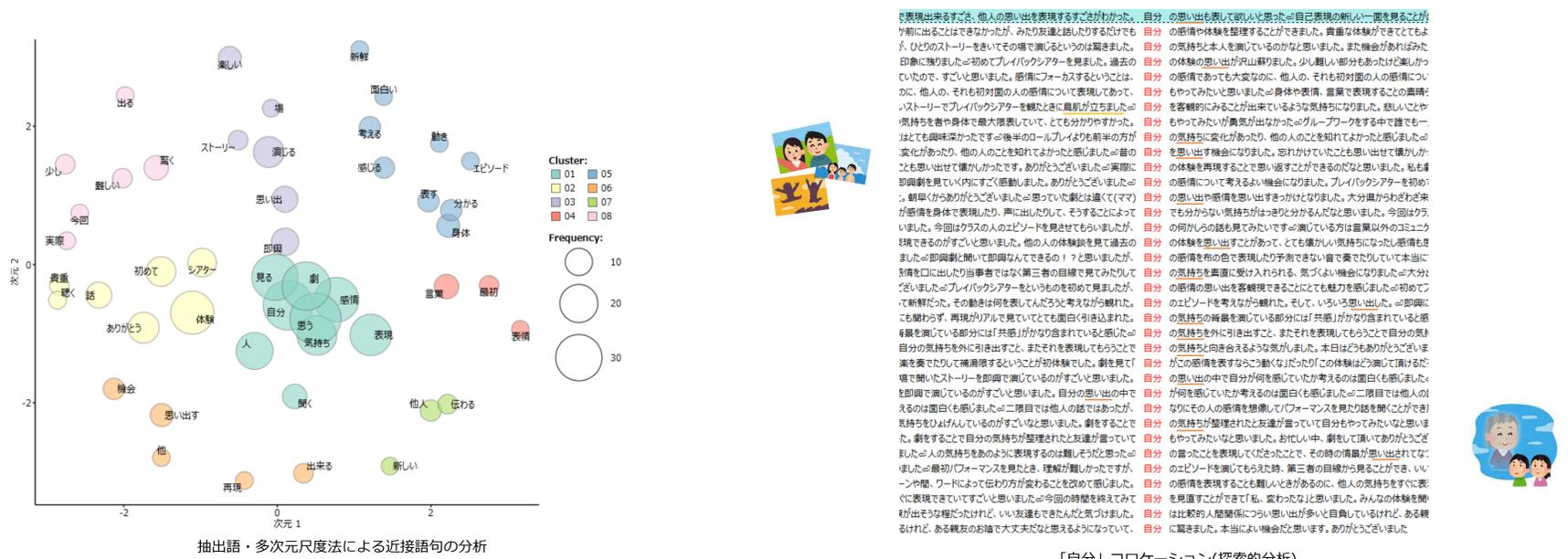
## 【結果】

すべての質問にたいして、9割以上が肯定的に回答した。自由記述では、感情(情動)にフォーカスすることの重要性や、語り手の物語に紐づく大切な思いを、言語だけでなく身体で表現することの重要性についての気づきが多く見られた。他者の物語を見ながら自分の過去のつらい思い出が蘇ったが、同時にそれを支えてくれた友人のことを思い出した学生もいた。



## 【考察】

短い時間ではあったが、演劇を通じたコミュニケーション教育の可能性を確認した。特に「語る」ことの意味を、身体表現を通して理解することは学生にとっても実にパワフルな体験であることが確認できた。「コミュニケーション能力の強化に関する内容を充実」(厚労省)する方策として、この授業は先駆的な取り組みと考える。アンケートから「自分を客観的にみているような気持ちになりました」「劇中の悲しいことやつらいことが心の中の声で再現されてとても引き込まれました」「他の人の体験談を見て過去の自分の体験を思い出すことがあって、とても懐かしい気持ちになった」などが多く見られた。KH Coder(言語分析ソフト)により学生の感想をコーパスデータ化し多次元尺度法により分析した結果、自分・見る・思う・感情・気持ち・劇、などの語が近接関係にあることがわかった。このうち「自分」をコンコーダンスにより探索的に分析したところ、PBTを体験することで、他者の物語と自分の思い出がリンクし、学生はそれぞれのライフストーリーと重ねあわせながら観劇していることが伺える(「思う」=思い出/思い出す、「気持ち」=整理する/向き合うなど)。換言すれば、この体験を通して観劇者自身と他者(テラー)の人生が深く共鳴しあっていたことが見て取れる。



「自分」コンコーダンス(探索的分析)

医療コミュニケーションの問題はどの大学でも取り組んでおりそれなりの成果も上げているが、実はそこで取り上げられる多くの事象は、場面や問題のはっきりしたコミュニケーション不全やハラスメント、インフォームドコンセントの問題が主流である。しかし一般社会の中でほんとうに大事なことは、言い出しにくい話の奥にある気持ちをくみ取ることや、非言語で表現されている他者の苦しみや痛みのような表現しづらい曖昧な部分である。演劇はまさにそういった曖昧な領域を扱うのには大変優れた芸術であり、そこから引き出される教育効果は高い(平田オリザ, 2012)。すなわち、演劇的手法にはさまざまなコミュニケーションの場が設定されるが、演劇という非日常空間を創造するためには、話を深く聴き、それを物語として組み立て、役を演じ、お互いの演技を見るという重層的で多面的な活動が含まれる。その過程では、異なる価値観を尊重し受け入れるための対話も必要で、時にはグループ内の葛藤をPBTにより乗り越える場面もでてくるだろう。演じるためのコミュニティそのものが、予定調和的な医療コミュニケーションの授業ではとうてい体験ができない、医療者にとっての深い学びとなると想像できる。